



第47回「おかねの作文」コンクール

「おかね」について見たこと・
聞いたこと・感じたこと

大阪府・高槻市立阿武野中学校 2年 松井 佳歩

私は、今まで募金の大切さをあまり深く考えたことがなかった。コンビニエンスストアやスーパーなどで募金箱をよく見かけるが、そこにお金を入れたことは一度もない。興味がないというわけではないが、本当に少しのお金で誰かが助かるのかという疑問があった。

先日、母と姉と駅の近くを歩いていた。すると、私より小さい子どもが何人か立っていた。前を通りすぎようとした時、その子ども達が一斉に大きな声で「募金をお願いします。」

と言った。その時前にいたのは、私達だけだ。だが、急いでいたこともあり、何もせず小走りで前を通りすぎようとした。なのに、その子ども達は誰一人嫌な顔をせず、それどころか私達の方を見てニコッと笑ってみせた。

なぜ、彼らは顔も見たことのない国の人のためにここまでできるのだろうと思った。それなのに、「募金活動がんばってね。」の一言もかけられなかった私達に対して、なぜあんなに気持ちよく笑いかけてくれたのだろう。

家に帰っても、気になっていたので募金について調べてみた。すると、びっくりするほどの資料がでてきた。その日私が使った3,000円で、現地の子ども1,500人にビタミンAを投与できるそうだ。私達は、普段から栄養のあるものを選んで食べることが出来ている。だが、食べることで栄養をとれない国の子どもは、ビタミンを投与しないと体が弱ってしまう。私は、すごく驚いた。私達があたりまえと思っている食生活が、全くあたりまえではなかったのだ。それに気づいた時、私の募金に対する気持ちが、ガラッと変わった。それと同時に心がモヤモヤ、ムカムカとして悔しくなった。あの時、気持ちよく募金をすればよかった。買い物で使った3,000円、帰りに買ったグミ、本当に必要なもの

のだったのか考えた。3,000円で買ったものは、文房具などだ。今使っているのが壊れたわけではない。ただ少し飽きたから、新しく売っていたものが欲しくなっただけだ。ゴミだって別にそこまで食べたいわけではなかった。姉が買っていたからなんとなく私も欲しくなっただけだ。思いだせば思いだすほど、無駄なお金の使い方をしてしまったこと、大事なチャンスを逃してしまったことを後悔した。そのことを母に話すと、

「そのことに気づけば、次は同じことしないから大丈夫。」

とはげましてくれた。次は募金しよう。誰かの役に立つお金の使い方をしようと思った。その日みたいに

「募金をお願いします。」

と言われたら私も笑顔で、お金を渡し

「ありがとう。がんばって下さい。」

と言いたい。暑い中ががんばってくれているお礼と、いっぱい寄付してくれる人がいるといいな、という気持ちだ。

私は、少しずつ募金に興味や関心を持ち始めた。私は、募金にもいろんな立場の人がいると思う。寄付をする人、受けとる人、支援してもらう人、そしてそれを繋^{つな}げる人だ。私は、募金は一本の線のように思った。寄付する方はいつも寄付する側、支援してもらう人はいつも支援してもらう側だと思っていたからだ。しかしそれはちがっていた。

東日本大震災の時、海外からもたくさん資金が届いた。その資金で被災地の人達はたくさんの方が協力し応援してくれていることに気づき、勇気づけられただろう。特に心に残っているのは、決して贅^{ぜいたく}沢な暮らしのできない子達から届いたお金の話だ。台湾の小さな村に暮らしている貧しい子ども達が、自分達の大切なお金を持ち寄って寄付してくれた。普段からお腹いっぱいご飯を食べられていないのに、だ。そのお金で買えた、欲しいもの、食べたいものがあつたにちがいない。だが、子ども達はそんなことより、被災地のことを心から心配して、支援という形でその気持ちを伝えようとしたのだろう。私は、金額ではなく、その人がどんな気持ちで寄付したかによって価値が大きく変わっていくんだと思った。募金は一本の線ではなかった。人と人が繋がる輪だったのだ。支援する方、してもらう方なんて関係なく、みんなが幸せを願っていた。自分



だけの幸せではなく他の人の幸せもと思った人が募金という方法を選び気持ちを伝えていたのだ。

この前、募金活動をしていた小学生達。あの子達は、募金の本当の意味にもう気づいていたのだ。一人でも多くの人に募金という心のメッセージを送ってほしいから。一人でも多くの人にそれが届いてほしいから。彼らは誰かの幸せのために、今自分ができることを一生懸命していたのだ。私に見せた笑顔、その意味が今の私には理解できると思う。人と人との繋がる輪をこわさないように。彼らが伝えてくれた心のメッセージを、次は私が伝えていきたい。

